知識探訪 多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会（JAMS）

過去、現在、未来をつなぐ体験型歴史アトラクション――ペナン歴史ギャラリー

篠崎香織（北九州市立大学外国語学部教授）

ペナン歴史ギャラリー入口。華語の名称は「ペナン歴史体験館」となっている（25年10月、筆者撮影）

世界文化遺産の街であるペナン島ジョージタウンは、博物館の街でもあり、個性的なテーマの民営の博物館やギャラリーが多数存在する。2025年３月にはペナン歴史ギャラリー（Penang History Gallery）が開館した。

同ギャラリーは、ハーモニー通りとして知られるカピタン・クリン・モスク通りからビショップ通り（Bishop Street）に入ってすぐの所にある。同ギャラリーが入る建物には、かつて別の博物館があった。ジョージタウンでは博物館を巡るアイデアが常に模索され、面白そうなアイデアを実際に試してみて、うまくいかなければ次のアイデアを試すというように、博物館を巡るアイデアの新陳代謝が活発であることがうかがえる。

館内の展示は大きく２種類に分けられる。一つは、ペナンがイギリス東インド会社の拠点となり歴史の表舞台に現れた1786年から、マラヤ連邦の１州としてイギリスから独立した1957年までの歴史に関する展示である。もう一つは、1950年代から1970年代ごろまでにかけて街やカンポン（田舎）の一角で見られた懐かしの風景を再現した展示である。

歴史に関する展示では、アジア人商人を頼りとしたイギリス東インド会社のペナンの開発、民族混成的な勢力同士が激しく衝突したペナン暴動（1876年）、孫文のペナン滞在（1910年ごろ）、ペナン港における第一次世界大戦の戦禍（1914年）、ペナンで生まれ隆盛した文化混成的な大衆芸能、日本軍によるペナンの空襲（1941年）と占領などの歴史が示される。

展示の横には「ペナン・タイムズ」と題した架空の新聞が張り出され、そこに展示の説明が記載されている。いずれの説明もペナンの歴史研究の成果を踏まえた詳細で充実したものであり、ペナンの文化的混成性に光を当てる。

ペナン歴史ギャラリーは、博物館というよりは、体験型アトラクションである。来館者はガイドと一緒に展示を回り、展示の内容や仕掛けに感心したり、驚いたり、笑ったりしながら、横にも縦にも空間が広がる延べ床面積約280坪をにぎやかに巡る。

懐かしの風景を再現した展示では、展示物に触れることができ、ガイドが「写真を撮りましょう」、「展示物を使ってこんなポーズを取ってみましょう」などと軽やかに促す。筆者は当初、少し斜に構えていたのだが、ガイドとのやりとりを重ねるうちに気づけば素直に展示を体感的に楽しんでおり、ペナン歴史ギャラリーの世界に引き込まれていた。

同一地点の今昔を対比した84組の写真が壁一面に掲示されているのは圧巻だった。写真には番号が振られ、すぐ横に掲示された地図上に番号が貼られ、撮影地点を確認でき、館外に出たら撮影地点に実際に行ってみようと思わされる。

また、古い写真がモニターに映し出され、時が止まった過去の風景だと思って見ていると写真が動画に変わり、モニターの中の人たちが生き生きと動き出すような、人工知能（ＡＩ）を駆使した仕掛けも多く見られた。

こうした展示の仕方は、過去を過去に留めるのではなく、過去が今に続くものとして、今この瞬間に動いている同時代的なものとして、感じさせるものであった。館内の世界が館外の世界とつながり、体験空間と日常の風景が連続して見えることで、歴史は静止した記録ではなく、今へと流れ込む生きた時間として立ち上がるように感じた。

ペナン歴史ギャラリーは、来館者を迎えるペナンの人々にとっても、ペナンの過去を語り直す営みを通じて、過去を固定化するのではなく、ペナンの現在と未来を考える契機にもなるであろう。

ペナンの歴史研究は、多様な地域とつながり文化混成的なペナンの過去を輝かしいものと捉える一方で、現在はそうではないと否定的に捉える側面を持つ。これに対して、ペナン歴史ギャラリーは、過去を現在と未来につなぐ可能性を秘めたプラットフォームとなりうるかもしれない。

＜筆者紹介＞
1972年、千葉県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。学術博士。在マレーシア日本国大使館専門調査員を経て現職。専門はマレーシアの地域研究で、華人社会と民族間関係を研究している。著書に『プラナカンの誕生：海峡植民地ペナンの華人と政治参加』（九州大学出版会、2017年）。日本マレーシア学会（ＪＡＭＳ）理事。

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます